

Title	比較都市社会学とM.ヴェーバーの都市論
Sub Title	Comparative urban sociology and the city by Max Weber
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1976
Jtitle	哲學 No.64 (1976. 1) ,p.59- 78
JaLC DOI	
Abstract	The new trend of contemporary Urban Sociology is Comparative Urban Sociology which is represented by Gideon Sjoberg. The focus of the present study is on the type of preindustrial city. Though it is very different from contemporary point of view, th study of preindustrial city from the perspective of Comporative Sociology was formerly the field of Max Weber's study. Apart from this, it was Don Martindale who pointed out the crisis of sociological theory in American Urban Sociology. A clue to the solution to this problem, he suggested, lies in studying afresh Weber's historical establishmental research. I am interested studing Weber's city from the standpoint of above mentioned two points. Part I. a) The position of cities in Weber's studies. b) The concept of city c) Theories of city : Principles of city formation, Theory of city population, Theory of city Gemeinde. Part II. The type of city a) Oriental city vs. Occidental city b) Ancient city vs. Medieaval city c) Inland city vs. Seaside city Part III. a) Geographical infulgence to city-relevant to Weber's action theory- b) Destiny of city Gemeinde. Through the analysis of these, I want to conclude on the meaning of Max Weber's city in connection to our present Urban Sociology. I hope to emphasize that Weber's city as it is form face little future. Weber's actual analysis through the theory of city Gemeinde only is not very useful to our explanation of cities. Hence, the problem is how we make new additions to the existing Weber's theories of city formation and population and adjust it to the present context making it more meaningful to contemporary studies. But lastly, beyond and above Weber's city is truely a kind of shining tounch for us in studing Comparative Urban Sociology.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000064-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000064-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 比較都市社会学と M. ヴェーバーの都市論

藤 田 弘 夫

### 〔一〕

現代はすぐれて都市の時代であり、現代社会はかつてないほど都市化された社会だといわれている。デービス (Kingsley Davis) やハウザー (Philip M. Hauser) 等の人口学的研究は都市化が全世界共通の趨勢であるばかりでなく、益々その速度を速めていることを伝えている。そして現在、都市化に伴う様々な矛盾は世界のほとんどの国が抱え込んでいる大きな社会問題となっている。とりわけ第3世界の都市化はブリーズ (Gerald Breese) やベリー (Brian Berry) 等の研究によって知られているように、都市化がかつて先進国が経験したことのない程広い範囲で、しかも急速に進行しつつあるのである。こうした世界の都市化に、今世紀の初頭パーク (Robert Ezra Park) による人間生態学 (Human Ecology) を方法論とする都市研究が提唱されて以来、世界の都市研究に指導的立場にあったアメリカの都市社会学者達は、ほとんど関心を示さなかった。彼らはもっぱら自分達の周辺で生み出されている様々な都市問題に没頭していたのである。しかし、第2次世界大戦とその後の国際状況の変化は、アメリカの都市社会学者達に世界各地での都市研究を要求したのである。こうして彼らはワース (Louis Wirth) のアーバニズム理論に代表される都市研究の様々な成果を念頭に外国へと出かけて行ったのである。しかし、彼らが文化を異にする外国での研究から見出したのは、自国での経験とはあまりにも違った都市現象だった。彼らにとって、外国での都市研究はシカゴ学派都市

研究以来、半世紀にわたって累積させてきた都市の社会学理論において自明のものとなっていた基本的命題すら、そのいくつかが瓦解するかもしれないことを意味したのである<sup>1)</sup>。このような都市研究の視野の拡大は、従来の都市社会学がアメリカでの資料から、あまりにも単純に都市の普遍的な理論を構成してきたことに反省を与えると共に、普遍的な都市理論構成のためには世界各地の都市との比較が必要であることを明かにしたのである<sup>2)</sup>。こうした観点から、ショーバーク (Gideon Sjoberg) は比較都市社会学 (Comparative Urban Sociology) を提唱したのである。そして、現在多数の研究がこうした視点から行なわれるに至ったのである。比較都市社会学の視点から行なった外国での都市研究を通じて、ショーバークは産業化の洗礼如何によって、都市を類型化することがきわめて有効であることを見出した。このことが彼の前産業型都市類型提唱の論拠となったのである<sup>3)</sup>。そして、現在の比較都市社会学はこの類型を時間軸と空間軸の両方に求めているのである。ここにわれわれが、比較社会的視点から前産業都市を研究した先駆的業績として、ヴェーバーの都市論に注目しなければならない第一の理由があるのである。

こうした観点とはまた別の点でヴェーバーの都市論に注目しているのがマーチンデール (Don Martindale) である。彼はアメリカの都市社会学が現在までに膨大な研究成果を累積させてきたにもかかわらず、研究に行きづまりをきたしているという認識のもとに、現在都市の社会学理論は危機のなかにあるというのである<sup>4)</sup>。そして、彼はヨーロッパで伝統的行なわれてきた都市研究を制度中心の都市論としてとらえ、特にヴェーバーの都市論に着目し、この歴史体制論的都市研究のなかにアメリカ都市社会学理論の危機を乗り越える手掛りを見い出そうというのである。本稿にはマーチンデールによるヴェーバーの都市論に対する評価がどこまで正鵠を得たものであるかを論ずる余裕はないが、ここに比較都市社会学とはまた別の面でのヴェーバーの都市論への関心が見られるのである。

では、アメリカ社会学において、ヴェーバーの都市論はどのような評価を受けてきたのであろうか。アメリカにおいてもわが国と同様にヴェーバーの業績に対して、様々な視角からおびただしい数の研究が行われている。しかし、彼の都市論に言及したものは決して多くはないのである。とりわけ都市社会学者によるヴェーバーの都市論の研究は、その重要性が早くから指摘されていたにもかかわらず、きわめて少ない。たとえばワースはヴェーバーの都市論をパークの「都市」と共に、自己の体系的アーバニズム理論に最も近いものだと述べるのである。しかし、ワースは如何なる意味でヴェーバーの都市論が彼のいう体系的アーバニズム理論に近いものであるかを明らかにしなかった。このためわれわれは、ワースのアーバニズム理論とヴェーバーの都市論という性格を異にする2つの都市理論の媒介項をなすものが何であるのかを推測することは困難である。むしろ、2つの都市理論は全く性格の異なるものであるとすら考えられるのである。何よりも、直接役立つ研究を重視するアメリカの都市社会学者達は、ショークのいうように、ヴェーバーの都市論を観念論的著作として関心を払ってこなかった。現在でも彼の都市論は、ほんの一部の学者が関心を持っているにすぎないのである。

シカゴ学派の都市研究以来、世界の都市社会学をリードしてきたアメリカ都市社会学の戦後の大きな流れをなすのが比較都市社会学であり、その焦点をなしているのが前産業型都市類型である。しかし、前産業型都市類型がワース的な現代産業都市を対極として構成されているものである以上、まず、西欧の前産業都市が問題とされなければならないだろう。そして、この西欧の前産業都市こそ、その問題関心といい、その方法といい、著るしく異なるものの、かつてヴェーバーが研究対象としてきたところなのである。同時に、マーチンデールによって現代のアメリカ都市社会学に内在する理論的危機が告発され、この危機の克服といった面からもまたヴェーバーの都市論への関心が高まっているのである。本稿は以上のような観点

から、従来あまり返り見られることのなかったヴェーバーの都市論が現代の都市社会学に如何なる意義を持ちうるのかを論じたい。

## 〔二〕

ここで問題としなければならないのが、まず第一に、ヴェーバーの都市研究がどのような問題関心からなされたものかということであり、次に彼の都市論において都市の概念内容をなすものが何であるかということである。周知の如く、ヴェーバーにとって最大の学問的関心は世界の魔術からの解放 (die Entzauberung der Welt) であった。換言するならば、近代資本主義はなぜヨーロッパにおいてのみ展開されるに至ったのかということであり、また近代資本主義はわれわれにとって如何なる意義を有するのかということであった。「経済と社会」<sup>6)</sup>・「宗教社会学論文集」<sup>6)</sup>・「社会経済史論文集」<sup>7)</sup>・「経済史」<sup>8)</sup>等に散見される彼の都市論もこのような問題関心から論じられたものであって、決して彼は都市研究に真正面から取り組んだわけではなかった。ここに、ヴェーバーの都市論が都市社会学者の関心をひかなかった最大の理由があるようである。更にヴェーバーの経済だけでなく、政治、美、宗教、知性等の諸領域にも個有の自律的展開を認める方法的立場は、社会現象の流動的側面を前面に押し出し、社会現象をどの領域で把握しているのかが必ずしも明確ではなくなった。このため彼は膨大なガズイスティックを行なったのである。彼の都市論もカズイスティッシュな叙述のなかに都市の理論を埋没させた結果、ウィットフォージェル (Karl A. Wittfogel) のいう迷宮的性格を呈するのである。

では、ヴェーバーは都市をどのようにとらえていたのだろうか。われわれは彼の都市の構成原理が「経済史」のなかでやや端的に表現されているのを見る。彼はゾンバルトが「土地の年貢が都市および商業の母である」と主張したことを批判し、「そこに定住すれば年貢を商人的に利用しうる可能性と、そこに定住して土地の年貢を商人的に利用しようという意図、

この客観可能性と主観的意図が相俟って都市の定住を惹起したのであり、かくて商業が最初の都市形成に対して決定的影響を与えたのである。」<sup>9)</sup>と述べるのである。ここでは西洋での都市の起源論が問題となっているため、商業における客観可能性と主観的意図が論じられているのであるが、この客観可能性と主観的意図の結びつきによる都市の構成原理は広く経済、政治、宗教等にも適用できるものであろう。ヴェーバーにはこのような構成原理のもとに密集した大量の人口集積地としての都市概念がまず第一次的にある。更に、彼は人口集積地としての都市が社会学的にも、経済的にも、法的にも規定できるというのである。だが、これらの概念による都市の規定の公分母をなすものといえ、都市とはともかく一つの少なくとも相対的にまとまった定住、すなわち一つの集落 (Ortschaft) であり、一つまたは数ヶ村の散在的な住居ではないということだけなのである<sup>10)</sup>。しかし、「自然科学にとって『法則』は普遍妥当的であればあるほど愈々重要であり、価値に富むのであるが、その具体的前提における歴史現象の認識にとっては、最も普遍的な法則はその内容が最も空虚であるから通常価値が乏しい。」<sup>11)</sup>というヴェーバーの社会科学に対する方法論的な立場からすれば、都市の人口による概念規定はその概念の妥当領域があまりに広範なものになるため、こうした概念規定の意義は少ないということになるだろう。

では、彼にとって知るに価した都市とはいったい何だったのであろうか、これに関連して、われわれはヴェーバーの死後発表された論文「都市-社会学的研究-」をヴィンケルマン (Johannes Winckelmann) が「経済と社会」の第4版の編集にあたって、支配の社会学の一部として「非正統的支配」(Die nichtlegitime Herrschaft) として位置づけたことに注目しなければならない<sup>12)</sup>。ヴェーバーは都市を合法的・カリスマ的・伝統的といった正統的支配に対して、非正統的支配の場としてとらえていたのである、彼の都市論執筆の意図は、あくまで近代資本主義や近代国家に適合的な上部構造を生み出した非正統的支配の場としての都市に限られたのである。そして、こ

の非正統的支配が、西洋においてのみ個有な都市ゲマインデを基盤として生み出されてくるのである。では、都市ゲマインデとは一体どのようなものなのであろうか。ヴェーバーは都市ゲマインデを次のように定義している。(1) 防御施設を持つこと、(2) 市場を持つこと、(3) 自分自身の裁判所と少なくとも部分的には独自の法を持つこと、(4) 団体 (Verband) の性格を持つこと、(5)(4) と関連して少なくとも部分的な自律性 (Autonomie) と自首性 (Autokephalie) とを持っていること、すなわち市民がなんらかの形でその任命に参加しうるような官庁による行政を持っていること。以上5つの指標があてはまる比較的強い工業的・商人的性格を持った定住地であるというのである。西洋の歴史においてこれらの権利は通常身分的特権 (ständischen Privilegien) として現われた。従って、これらの身分の担い手が市民だったのである<sup>13)</sup>。つまり、ヴェーバーの都市概念には、単なる人口集積を示す時と都市ゲマインデを示す時と広狭二つの場合があるのである。

### 〔三〕

ヴェーバーはゲマインデとしての都市の理念型を、古今東西の都市に求め、この理念型の偏差から都市の類型化を行なうのである。まずゲマインデとしての都市と対極的な性格を示すのが、アジアの都市である。なるほどアジアの都市も西洋の都市と同様に、市場であり、要塞であり、工業や商業の大所在地であった。またギルド等の職業団体もかなり明確な権限を持っており、都市はしばしば特別の裁判区をなしていたこともあるのである。しかし、アジアにおいては巨大な政治団体の存在と、武装と給養とをこの大政治団体から受けている軍隊が決定的な軍事力をなしていたことから、この大政治団体に対して自治を主張しうるようなゲマインデは、はじめからその存立基盤を欠いていたのである。

更に、アジアで都市ゲマインデの成立を阻止したのは呪術が強い機能を保持したまま存在していたことである。アジアの住民は呪術的に大きな拘

束を受けていたばかりでなく、これに伴うその他、様々なタブーの拘束を受けていたのである。たとえばインドの都市において、都市の祭祀を行なうために、カーストを越えた共同の団体行為を行なうことなど考えられもしないことだったのである。

つまり、アジアの都市においては大政治団体と呪術の存在によって、都市住民は決してそれ自体で団体行為の担い手にはなり得ず、団体行為は門閥の氏族や様々な職業団体によって担われたのである<sup>14)</sup>。従って、都市には都市そのものを代表する機関も存在しなかったし、まして都市ゲマインデの役人等は存在しなかった。都市とは単に行政区画を意味したにすぎないのである。アジアの都市は何よりもまず大政治団体の諸官庁の所在地だったのである。

では、西洋において都市ゲマインデが成立し、市民身分なるものが知られるようになったのは如何なる理由によるものなのであろうか。ヴェーバーは自弁で軍事的武装を行なうという軍制と、宗教的に兄弟の契を結ぶということが西洋で都市ゲマインデの成立を可能ならしめたものだという<sup>15)</sup>。武装自弁の原理が維持された西洋では、大政治団体が戦争手段を独占していたアジアと違って、王は軍隊参加者の好意に大幅に依存しなければならなかった。従って、王は軍人が比較的大きな団体を形成した場合には、この団体の意向を無視することができなかったのである。ここに、西洋で都市ゲマインデが成立する第一の基盤があった。次に、ヴェーバーは西洋では、アジアで都市ゲマインデの成立を阻止するのに大きな役割を演じた呪術的障害が除去されたことをあげる。これには西洋においてはアジアと異なり司祭の独占権がなかったことと関連して、次の3つの出来事が重要であった。(1) ユダヤの予言はユダヤ教の内部での呪術を否定したこと、(2) 聖霊降下の奇蹟、すなわちキリストの聖霊と兄弟の契を結ぶこと。(3) アンティオキアでのパウロとペテロの会合以後、異邦人と祭祀を行なうことが可能になったこと。これら3つの事件によって、当時氏族、種族、民族



の間にまだ多少存在していた呪術的障害は完全に除去されたのである<sup>16)</sup>。つまり、西洋においては武装能力を持つ都市住民の存在と兄弟盟約の可能性が、都市ゲマインデの形成に決定的な作用を果たしたのである。

しかしながら、西洋の都市も決して一義的に扱えるものではない。ヴェーバーは更に、西洋の都市を古代都市と中世都市に類型化するのである。確かに、西洋においては古代都市も中世都市も、その発展の初期には類似した性格を持っていた。住民の関心はまず第一に身分的なものに向けられていたのであり、階級的な関心は二次的なものでしかなかった。また、門閥も平民が勢力を増大させた時には、古代都市にあってはデーモスやトリプスに、中世都市にあってはツンフトに加入せざるを得なかったという点でも共通していた。しかし、古代と中世の都市の間には、やはり決定的な相違があったのである。古代都市にあっては門閥に対立していたのは常に農民であり、典型的市民といえば土地所有者であった。これに対して、中世都市では門閥に対立していたのが企業者と手工業者であり、中世都市の典型的市民は商人または手工業者であった。しかも完全市民であるのは都市での住宅所有者であったのである。従って、特殊中世的な生活困窮者が貧困な商工業者、すなわち商工業的失業者であり、特殊古代的なプロレタリアは土地所有を失ったために、政治的に格下された土地所有者だったのである<sup>17)</sup>。中世都市は軍事的・租税的な利害関心から、都市の空気は自由ならしむという原則のもとに、身分的不平等や自由の束縛を徹廃していった。他方、古代では都市の発展に伴って奴隷需要が増大し、大量の下層民が都市に流入するに至るのである。つまり、古代都市はその発展に伴って、身分的不平等が益々拡大していったのである。更に、古代都市民の営利関心は、当時の軍事力の基礎をなしていたのが都市の軍隊であったことに関連して、武力によって営利関心を追求した。戦争を日常的に行なう必要があったのは、調貢や戦利品や貢納の分配が市民生活に決定的なものとなっていたためである。平和的営利に従事する者は、この分配を受けなかつ

た。このため、古代都市は一種の政治ツンフトのような形態を示すのである。市民の数が常に制限された理由もここにあるのである。これに対して、中世においては、決定的な軍事力が都市の外部に存在したため、市民ツンフトの軍隊は防衛的なものにならざるを得なかった。都市はツンフトの時代を通じて、その営利的関心を平和的持続的営利によって満足させざるを得なかったのである<sup>18)</sup>。

このようにヴェーバーは西洋の都市を古代都市と中世都市とに類型化した後、中世都市を更に南欧都市と北欧都市に類型化するのである。そして、中世都市が、そのゲマインデを理念的純粋さで展開したのがアルプス以北の北欧都市だったというのである。この点では中世都市といえども、南欧都市は古代都市と中世北欧都市の中間形態を示すにすぎないのである。

#### 〔四〕

おおよそこのように粗雑に要約した都市の類型学において、アジアで呪術と共に都市ゲマインデの成立を阻んだ大政治団体の成立基盤は何だったのだろうか。ヴェーバーはエジプト・近東・インド・中国においては治水の問題が文化の発展に対して、決定的意義を持っていたとして地理的要因を重視するのである。官僚制度も臣下の賦役も、また国王に所属する官僚の活動に対して、臣下がその全生活をあげて隷属するという事情も、ことごとくみな治水と関連しているというのである<sup>19)</sup>。たとえば、中国の都市の繁栄は住民の政治的経済的大胆さに依存したのではなく、むしろ皇帝の行政、なかでも河川行政に大幅に依存したのである<sup>20)</sup>。しかし、ヴェーバーの方法論的立場からして、地理的要因の作用を全社会の決定要因とすることは、あり得ないだろう。彼は注意深く、地理的要因もまた過大評価してはならないと述べるのである<sup>21)</sup>。

ヴェーバーは西洋における資本主義の発展に関しても、その第一に外部的条件として地理的要因をあげる。中国やインドでは内陸交通に多大な経

費を必要とすることが、商業に大きな富の蓄積を可能とする事態をつくり出し、商業資本によって、産業資本主義的制度を成立させる可能性を有している社会層の発展を強く阻害したというのである。これに対して、西洋はこうした可能性を持たない地中海を内海とする沿岸文化だというのである。しかし、ヴェーバーは資本主義が発展したのが大陸内陸部の都市であって、地中海沿岸の都市でなかったという逆説によって、地理的要因も、あくまで外部的条件の一つにすぎないことを強張する。たとえば、イタリアにおいても、半島の内陸部に位置するフィレンツェの資本主義は、ジェノヴァやベニス of 沿岸都市の資本主義よりも、より一層の発展を経験するのである<sup>22)</sup>。しかし、この逆説もまた地理的要因から説明される。ヴェーバーは古代が沿岸文化であり、中世が内陸文化であるとの認識のもとに資本主義の発展に関して次のように述べる。古代にとって特徴的なことは、近代の産業資本主義に接近する発展ではなく、それから遠ざかる正反対の発展である。このような発展をたどらしめたものとしては、古代における資本利用の努力が、奴隷労働の限界につきあたったという事実もきわめて本質的な要因である。しかし、この点は中世においては事情が違っていた。これには純粹に歴史的な理由もあったが、この場合、何にもまして資本主義発展の地理的舞台が転移 (die Verlegung des geographischen Schauplatzes) したことが、その原因であった<sup>23)</sup>。

これをヴェーバーの方法論に求めると、他人の行動に主観的に関係された意味を持っていない地理的要因等は、理解社会学に直接関連するものではないだろう。しかし、彼はこれらの要因は決して社会的に無視してよいものではなく、むしろ理解社会学にとって、きわめて本質的な部分にかかっているというのである。つまり、地理的要因等は理解社会学にとって、行為の条件や結果としての役割を持っており、行為の規定根拠をなすものだというのである<sup>24)</sup>。このように、ヴェーバーにとって地理的要因は決して文化を決定するものとしてはとらえられていない。しかし、文化を大き

く規定する作用を持つものだったのである。

西洋中世に大量現象として、最も理念型に近い形態を示すに至った都市ゲマインデは、その後、西洋世界の封建的・分権的政治秩序が再び巨大な政治団体に編成されてくると共に、没落してゆくのである。この点では古代都市も同様の運命をたどった。古代においても、中世においても、都市ゲマインデは官僚的に組織された大政治団体のなかに没したのである。近代の家産官僚国家は、都市ゲマインデがつくりあげていた官職装置を吸収できるだけの政治的・財政的権力手段を保持するに至ると、都市ゲマインデをがっしりと自己の支配のなかに組み込んだのである。近代国家は都市ゲマインデの成立に決定的な契機を与えていた都市の自律的な軍事能力を、都市内の警察用のものを除いて、完全に自己の権力下に統合するのである。ただ、国家の発展が地方的な分邦形態をとったドイツのようなところでは、一部の都市ゲマインデが政治的な特殊団体として国家と並んで存続していった。だが、一般的には近代の家産官僚国家は、都市政務官の地位を、国家の他の諸官庁と同じ資格を持つにすぎない一官庁に変えてしまったのである<sup>25)</sup>。

しかし、近代国家は決して都市の経済政策を一義的に阻止しようとしたわけではない。近代の家産制的権力が都市の経済政策を破棄したのは、家産制的権力が資本主義的な傾向を強化していくにつれて、国家の特権的・独占的経済政策が都市の地方的・特権的経済政策と衝突した場合であり、この限りであった。今や、近代国家の内部を自由に移動できるようになった資本は、伝統的な都市の経済圏を超えて、新しい論理を貫徹しはじめていた。もはや、資本主義的企業は伝統的な都市の経済政策のなかに、その支柱を見い出せなくなったばかりでなく、これらの企業は、もはや地方的な企業家達によっては担われ得ないほど巨大なものとなっていたのである<sup>25)</sup>。資本主義的企業は自己の論理のより一層合理的な貫徹を求めて、新しい場所に移動していったのである。この結果、16世紀以降多数の都市が経済

的にも没落していった。しかし、ヴェーバーは近代資本主義が中世都市の作りあげていたの商業組織と工業組織の上に、自己の生育のための条件をつくり出していたことを強調するのである。近代資本主義は確かにツンフトに対する激しい闘争を行った。にもかかわらず、近代資本主義は常にツンフトによってつくられた軌道と法形態を利用することによって、自己の論理を貫徹しようとしたのである<sup>27)</sup>。そして、こうした中世都市の没落は、同時に近代国家の内部に国家的規模を持った巨大な都市が出現することを意味したのである。古代世界の没落後、久しくとだえていた巨大な都市が再びヨーロッパに現われたのである。

#### 〔五〕

以上明らかにしてきたように、ヴェーバーにとって知るに価した都市とは、大政治団体と大政治団体との間に開花した歴史的間奏曲 (das historische Intermezzo) としての、都市ゲマインデだったのである。われわれは彼の都市論を現在の都市社会学に位置づける前に、マーバー (Vatro Murvar) の指摘に従って、ブルンナー (Otto Brunner) の主張に耳を傾けてみよう<sup>28)</sup>。ブルンナーは中世都市の成立に関して、中世初頭に成立したグルントヘルシャフトが、都市的なギルドやツンフト等のゲノツセンシャフトリッヒな人的結合を可能ならしめる余地を既に含んでいたという。彼はすべてのゲノツセンシャフトはヘルシャフトの枠内で成長し、自己の内部においてさえヘルシャフト的要素をつくりあげていった。これこそが都市ゲマインデだということである。そして、この2つの構成原理は相互に関連させてはじめて理解することのできるものであり、およそ都市はそれだけを切り離して考察できるものではなく、その時々における周囲の政治的・社会的構造全体のなかに位置づけられなければならないということである<sup>29)</sup>。こうしてみると、確かにヴェーバーの都市論には一彼にとって知るに価した都市があくまで非正統的支配の場としての都市という限定された

概念であったにしても一都市だけがあまりにも独立して抽出されており、農村との関連が切断されがちであることは否定できないだろう。

このことを踏まえて、ヴェーバーの都市論は現在の都市社会学に如何なる意義を持ち得るのだろうか。彼が直接考察の対象とした都市ゲマインデは近代国家の成立と共にその姿を没した。しかし、近代国家の成立は同時に首都機能等の国家的規模の機能を持った巨大な都市を出現させたのである。これらの都市はその後、近代国家の成熟に伴って、益々巨大なものになっていったのである。ここに歴史上はじめて、前産業型都市の一応の限界と考えられる 100 万都市の数倍もの人口を持った都市が出現するのである。西欧における都市化はその後、更に速度を増し、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、その頂点を迎えるのである。しかし、以後今日に至るまでこの種の巨大都市へと新たに成長していく都市は見い出すことができない。これに対して、西欧以外の地ではこの種の巨大な都市がいたるところに出現する。とりわけ、第 2 次世界大戦後の都市化はいわゆる首位都市 (Primate City) と呼ばれる巨大な都市を、第三世界に多数出現させたのである。しかも、これらの都市を調査したアメリカの社会学者を驚かせたのは、これらの都市で見い出される都市現象が決して、ワースのアーバニズム理論で示されているような社会学的特性を示すものではなく、むしろ、それぞれの地域での農村の生活様式がそのまま都市に持ち込まれているようにさえあったことである<sup>30)</sup>。こうした都市と農村の《統一的性格》は、これらの地域では都市ゲマインデの成立を経験しなかったことに関連するのではないだろうか。西洋においては、確かに、都市ゲマインデは近代国家の生成と共にその姿を没しはした。しかし、現在西ドイツにおいて、ハンブルクとブレーメンが州と同様の強い自律的性格を持った都市として存在していることに象徴されているように、西洋の都市は他の地域の都市と比較すれば、はるかにゲマインデ的性格を現在も強く残しているのである。つまり、ヴェーバーの都市論は比較都市社会学にとって、単に彼のいう認

識根拠 (Erkenntnisgrund) にとどまるものではないのである。この点で、都市ゲマインデを都市論の中核に据え、古今東西の都市を比較検討したヴェーバーの都市論は、現在の比較都市社会学にとって、彼のいう実在根拠 (Realgrund) としても先駆的業績たり得ることを意味しているのである。

更に、ヴェーバーの都市論で大きな意味を持ってくるのが、彼が都市の規定要因の一つとしてあげた地理的要因の作用である。彼の (1) アジアの都市と西洋の都市 (2) 古代都市と中世都市 (3) 北欧都市と南欧都市といった都市の類型化は、(1) と (3) が地域的な区分であるのに対し、(2) を区分するものは時間軸である。もし、彼が古典的な歴史学派経済学者達のような発展段階説を認めていたとするならば、この地域差は時間差に還元することができるだろう。彼が歴史学派の子として、このような思考をそのまま継承していたということはあるにせよ、「発展もまた理念型として構成され、この構成は非常に高い索出的価値を持つことができる」<sup>41)</sup> と述べたヴェーバーが、一体どのような形態で都市全体の理念的発展構成を認めていたのかということは、彼の著作からは決して明らかではない。われわれはヴェーバーがあげた地理的要因の作用に多くの文化意義を認めれば認める程、彼の都市論は地域差に基づく静的な都市の類型学という色彩を強めるだろう。ヴェーバーの都市の構成原理に即していえば、都市形成の客観可能性を大きく規定する地理的要因の作用は、この問題を真正面から論じてしかるべき都市地理学においても、現在必ずしも明らかではない。この点からも、地理的要因を行為の規定根拠としてとらえるヴェーバーの見解は、論ぜられるべき多くのものをわれわれに提供しているのである。

こうした観点から、われわれはショールパークのように単純に、ヴェーバーを価値指向学派 (Value Oriented School) の都市研究者として位置づけることはできない<sup>32)</sup>。むしろ、われわれはショールパークの前産業型都市類型

に関して、アボット (Walter F. Abbot)<sup>33)</sup> 等の評価があるものの、コックス (Oliver C. Cox) が指摘しているように<sup>34)</sup>、この類型があまりにも違った都市を一様に取り扱いすぎているという危険すら感じるのである。こうした観点からも、都市ゲマインデを中核に据え前産業型都市の下位類型の構成を試みたヴェーバーの都市論は現在のわれわれにとって、注目すべき都市研究として位置づけることができるであろう。しかし、われわれにとって、ヴェーバーの都市論を構成する都市の構成原理・都市の人口の理論・都市ゲマインデの理論の三つの理論のうち、彼がもっぱら実際に都市論で展開したゲマインデの理論は、現在の都市社会学にとって、決してそのままでは継承発展できるものではない。ヴェーバーにとって知るに値した都市とは、あくまで非正統的支配の場としての都市だったのである。むしろ、現在の都市社会学にとって重要なのは、彼にとって直接の関心の枠外に置かれた都市の構成原理であり、人口の理論である。しかし、都市の構成原理やこれに基づく人口の理論を、そのまま都市現象の説明に用いたとしても、ヴェーバー自身が指摘しているように、理論の妥当範囲があまりにも広く、決して有効な研究を行なうことはできないだろう。ショーバークも述べているように<sup>35)</sup> 同じ人口を持つ都市でも、国によってその持つ意味が違っているのである。グリア (Scott Greer) によって、「経済学上の都市は膨張し拡散してしまった。政治学上の都市は自治を失い一国の社会組織のなかに没してしまった。社会学上の都市は現代社会の一脈絡・一標本であるより大きな全体とは区別できなくなってしまった」<sup>36)</sup> と都市研究の危機が訴えられている今日、われわれの課題は、ヴェーバーの都市論に即していえば、都市の構成原理に基づく人口の属性に関連させて、ある特定の社会現象に都市現象としての意味を賦与できる枠組の設定にかかっているのである。この枠組が都市の社会構造なのである。そして、この社会構造に関する諸命題の論理学こそが都市の社会学理論をなすものでなければならない。



こうしてみると、現在われわれが、ヴェーバーの都市研究を貴重な遺産として受け入れるにしても、彼の都市論はそのままの形では継承発展できるものではないのである。しかし、それにも増して、ヴェーバーの都市論は現在の都市社会学にとって、恐るべき該博な知識を雄大な構想のもとに、きわめて緻密な論理を展開することによって打ち建てられた、やはり素晴らしい輝きを持った一種の比較都市社会学なのである。

注

- (1) アメリカ国内での第2次大戦後の都市構造の変化とこれに伴うアーバニズム理論の限界については、拙稿「アーバニズム理論とサバービア」慶応義塾大学社会学研究科紀要 15 号 1975, 9-15 頁
- (2) Gideon Sjoberg, "Comparative Urban Sociology" in R. K. Merton & oth. (eds.), "Sociology Today" Harper & Row N. Y. 1959, Vol. II p. 349
- (3) Gideon Sjoberg, "The Preindustrial City" 1960. ショーバーク 倉沢進訳「前産業型都市」鹿島出版会
- (4) Don Martindale, "Prefactory Remarks: The Theory of the City" in Martindale & Neuwirth (transrated and edited), "The City by Max Weber" The Pree Press N. Y. 1958, p. 42
- (5) Max Weber, "Wirtschaft und Gesellschaft -Grundriss der verstehenden Soziologie-" 5 Aufl. besorgt von Johannes Winckelmann J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen 1972. 以下 *W.u.G.*, と略記 (5) と同様 (6) (7) (8) (11) のヴェーバーの論文集については、邦訳はそのつど引用箇所を示す。しかし、訳文は必ずしも引用文献に従わない。
- (6) Max Weber, "Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie" 2 Aufl. J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen 1922. 以下 *G.A.z.R.S.*, と略記
- (7) Max Weber, "Gesammelte Aufsätze zur Sozial-und Wirtschaftsgeschichte" J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen 1924. 以下 *G.A.z.S.W.*, と略記
- (8) Max Weber, "Wirtschaftsgeschite" Abriss der universalen Sozial-und Wirtschaftsgeschichte aus den nachgelassen Vorlesungen, herausgegeben von S. Hellman u. M. Palyi München 1923. 以下 *W.G.*, と略記

- (9) *W.u.G. libid.*, S. 277 黒正巖・青山秀夫訳「一般社会経済史要論」下巻 岩波 186 頁
- (10) *W.u.G.*, op. cit., S. 727 世良晃志郎訳「都市の類型学」創文社 3~4 頁
- (11) Max Weber, “*Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*” 4 Aufl. J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen 1973. SS. 179-180 以下 *G.A.z.W.L.*, と略記. 富永祐治・立野保男訳「社会科学方法論」岩波 57 頁
- (12) *W.u.G.* op. cit., Johannes Winckelmann., “Vorwort zur vierten Auflage S. XXVII
- (13) *W.u.G.*, *Ibid.*, S. 736 世良訳 42 頁
- (14) *W.u.G.*, *Ibid.*, S. 740 世良訳 52-53 頁
- (15) *W.G.*, op. cit., SS. 276-277 黒正・青山訳 下巻 182-183 頁
- (16) *W.G.*, *libid.*, SS. 276-277 黒正・青山訳 下巻 184 頁
- (17) *W.u.G.*, op. cit., S. 798 世良訳 292 頁
- (18) *W.G.*, op. cit., SS. 283-284 黒正・青山訳 下巻 204 頁
- (19) *W.G.*, *libid.*, SS., 275-276 黒正・青山訳 下巻 182-183 頁
- (20) *G.A.z.R.S.* Bd. I op. cit., S. 294 木全徳雄訳「需教と道教」創文社 22 頁
- (21) ホーニヒスハイムはヴェーバーが黄金時代を迎えていたともいえる当時のドイツの地理学に、きわめて懐疑的であったことを伝えている。しかし、このこととは裏腹にヴェーバーの後期の著作には、歴史の根底粹としての地理的要因の作用が強くその影を落してくるのである。Paul Honigsheim, “On Max Weber” The Free Press N. Y. 1968 大林信治訳「マックス・ウェーバーの思い出」みすず書房 55-56 頁
- (22) *W.G.*, op. cit., SS. 301-302 黒正・青山訳 236-237 頁
- (23) *G.A.z.S.W.*, op. cit., S. 270 渡辺金一・弓削達訳「古代社会経済史」東洋経済 486 頁
- (24) *G.A.z.W.L.*, op. cit., SS. 430-431 林道義訳「理解社会学のカテゴリー」岩波 18 頁  
*W.u.G.*, op. cit., S. 6 阿閉吉男・内藤莞爾訳「社会学の基礎概念」角川書店 21 頁
- (25) *W.u.G.*, op. cit., S. 791 世良訳 269 頁
- (26) *W.u.G.*, *libid.*, S. 793 世良訳 275 頁
- (27) *G.A.z.S.W.*, op. cit., S. 268 渡辺・弓削訳 486 頁
- (28) Vatro Murvar, “Some Tentative Modification of Weber’s Typology: Occidental versus Oriental City” in Medows & Mizruch (eds.), “*Ur-*

- banism Urbanization and Chang: Comparative Perspective* Addison-Wesley 1969. p. 59
- (29) Otto Brunner, "*Neue Wege der Verfassungs und Sozialgeschichte*" 2 Aufl. SS. 199-224 Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen 1968 石井他訳「ヨーロッパの歴史と精神」岩波 306-346 頁
- (30) Brian J. L. Berry, "*The Human Consequence of Urbanization*" Macmillan London 1973 pp. 74-114
- (31) G.A.z.W.L., op. cit., S. 203 富永・立野訳 91 頁
- (32) Gideon Sjoberg, "Theory and Research in Urban Sociology" in Hauser & Schnore (eds.), "*Study of Urbanization*" John Wiley & Sons., N. Y. 1965. p. 171
- (33) Walter F. Abbott, "Moscow in 1897 as a Preindustrial City" *American Sociological Review* Vol. 39 August 1974. pp. 542-550
- (34) Oliver C. Cox, "The Preindustrial City Reconsidered" in Meadows & Mizruchi (eds.), op. cit. p. 26
- (35) Gideon Sjoberg, "Theory and Research in Urban Sociology" in Hauser & Schnore (eds.), op. cit., p. 164
- (36) Scott Greer, "*The Emerging City: Myth and Reality*" The Free Press 1962. 奥田道大・大坪省三訳, 「現代都市の危機と創造」鹿島出版会 15-16 頁

〔付記〕 本稿は昭和50年11月2日成蹊大学で行なわれた日本社会学会第48回大会での発表用草稿として作成したものである。なお、本稿は本紀要収録にあたって、紙幅の関係上大幅に論点を削除せざるを得なかった。削除したいくつかの論点についてはいずれ時期をみて論じたいと思う。

## Comparative Urban Sociology and the City by Max Weber

*by Hiroo Fujita*

### Résumé

The new trend of contemporary Urban Sociology is Comparative Urban Sociology which is represented by Gideon Sjoberg. The focus of the present study is on the type of preindustrial city. Though it is very different from contemporary point of view, the study of preindustrial city from the perspective of Comparative Sociology was formerly the field of Max Weber's study.

Apart from this, it was Don Martindale who pointed out the crisis of sociological theory in American Urban Sociology. A clue to the solution to this problem, he suggested, lies in studying afresh Weber's historical establishment research.

I am interested studying Weber's city from the standpoint of above mentioned two points. Part I. a) The position of cities in Weber's studies. b) The concept of city c) Theories of city: Principles of city formation, Theory of city population, Theory of city »Gemeinde«. Part II. The type of city a) Oriental city vs. Occidental city b) Ancient city vs. Medieval city c) Inland city vs. Seaside city Part III. a) Geographical influence to city—relevant to Weber's action theory— b) Destiny of city »Gemeinde«.

Through the analysis of these, I want to conclude on the meaning of Max Weber's city in connection to our present Urban Sociology. I hope to emphasize that Weber's city as it is form face little future. Weber's actual analysis through the theory of city »Gemeinde« only is not very useful to our explanation of cities. Hence, the problem is how we make new additions to the existing Weber's

theories of city formation and population and adjust it to the present context making it more meaningful to contemporary studies.

But lastly, beyond and above Weber's city is truly a kind of shining touch for us in studying Comparative Urban Sociology.